ポリティカにっぽん

01 5/19 朝

戦争の語り部たる二人の議員

早野 透
（本社コラムニスト）
thayano@clubAA.com

「外務省は伏魔殿だ」と語って以来、田中真紀子外相はワイドショーで外務官僚との対立ばかり取りざたされてきたけれど、国会ではそんなことばかり議論しているわけではない。ある日の参院外交防衛委員会のことである。

共産党の参院議員、吉岡吉典氏、73歳。「私は歴史教科書問題が起きてから、やはり日本のしたことをもっと真剣に考えなければならぬといろいろ読み直して考えました」と質問を切り出した。真紀子外相には事前に資料としてコピーが届けてある。

そのひとつは1984年に出版された三笠宮崇仁著「古代オリエント史と私」の中の若いころを回顧した一節である。吉岡氏は「当時、皇族は軍人になることが義務づけられていて中国戦線に行ったと三笠宮はこう書いているんです」と披露する。

イラスト：吉村 善治郎 / The Asahi Shimbun

「私（三笠宮）の同期生の青年将校から、兵隊の胆力を養成するには生きた捕虜を銃剣で突き刺させるに限ると聞きました。多数の中国人捕虜を貨車やトラックに積んで満州の広野に連行し、毒ガスの生体実験をしている映画も見せられた……」

三笠宮は昭和天皇の弟。この本には「これは氷山の一角に過ぎない」と書いていて、ひところ話題になったことでもある。だが、吉岡氏が「これは、いま問題になっている教科書の編者たちが忌み嫌う東京裁判の文書ではありません」と言うのを聞けば、一種の説得力がある。

さらに吉岡氏は、陸奥宗光の右腕だった外務官僚が「日清戦争や満州国は侵略」とすでに認めている外務省文書、「朝鮮の三・一独立運動に立ち上がった人々を教会に閉じこめて火を放って殺した。失火として処理した」と記述した「不逞団関係雑件」という外務省ファイルなど次々と紹介した。さすが「外交文書を読むのが道楽」という吉岡氏ならではである。

吉岡氏は「今の教科書問題を判断する上で、最低これは公平に読んで国民の判断に資するべきだというものを幾つか外務省が選んで発表してもらいたい」と述べ、「外相と外務省に提案したい」という言い方をした。かつての赤旗編集局長でむろん共産党の立場ながら、日本外交を深く思いやってきた吉岡氏、真紀子外相と外務官僚の対立の行方も心配らしい。

真紀子外相は「国会審議を消化するのに目いっぱい、ハムスターのようにこちょこちょ暮らしています。私も三笠宮殿下の本を読みたい。国会にこれだけ読んでいる方がおられることに感動しました」と答えた。吉岡氏の思いは伝わったのであろう。

続いて社民党の参院議員、前田英夫氏、78歳。「今、国民の90％が戦争体験のない方です。ですから私は戦争を体験した者として、この委員会で戦争の語り部の役割を果たしたい」と語り始めた。

「昭和19年10月、横須賀の海軍航海学校。夕方、全員集められ『おまえたちの中から特攻隊員を募集する。希望者は明朝8時までに申し出ろ』と。夕食を食べてもだれも口をきかない。夜、階段ベッドの上の男は身もだえするように寝返りをうっている。隣のベッドの男が教官室に向かった。入りますと言っているのが聞こえてくる。ああ、あいつは志願したなあ、とこちらは焦るわけですよ」

特攻はそのまま死を意味する。田氏も上の男も寝られなかった。朝まで走馬灯のようにこれまでの人生の瞬間が脳裏に浮かんだ。400人のうち40人志願して全員死んだ。母一人、子一人だった上の男も、結局は戦艦大和とともに沈んだ。田氏は2カ月後、少尉任官とともに特攻隊へ行ったが生き残った。

「戦争とは弾の中で死んでいくだけでない。内面的な人間の苦しみのひどさ、そういうことをぜひわかっていただきたい」と田氏は結んだ。今度は中谷元防衛庁長官が「肝に銘じて受け取らせて頂きます」と答えた。

ミサイル防衛などと戦争の技術化が進む時代、パーティーを開いてワインを飲むのが外交であるかのようにも錯覚してしまう時代に、戦争の語り部たらんとする長老議員の存在は、わが国会の大切なもののひとつである。